



豊橋市美術博物館友の会だより

-2015年-春号 **Vol.91**
FU風伯HAKU
Spring 2015

Shirvan

展覧会紹介

パナソニック 汐留ミュージアム所蔵 ジョルジュ・ルオー展

開催中 3月29日(日)まで 月曜日休館
豊橋市美術博物館 2階展示室

ジョルジュ・ルオーの《避難する人たち（エクソドゥス）》（挿図1）の主題は、モーセとユダヤ人がエジプトから脱出する旧約聖書の『出エジプト記』です。重荷を背負い、身をかがめて歩く家族の痛々しい姿が描き出されています。ルオーは画業初期からこの物語をたびたび取り上げています。このテーマにルオーが関心を持ったのはなぜでしょうか。

1871年、ルオーは砲撃を避けて地下倉庫にいた母親のもとで生まれました。当時パリでは、労働者たちが中心となって樹立した革命政権パリ・コミュンと政府軍が戦っていました。生まれ故郷ベルヴィルは、フランス語で「美しい街」を意味するものの、実際は貧しい人が多く住む地域でした。家具職人を父に持つルオ



1.《避難する人たち（エクソドゥス）》1948年

ーも、決して裕福とはいえない家庭で育ちました。彼の絵には社会の弱い立場の人がしばしば登場します。冒頭で紹介した作品のあてどなく歩き続ける難民は、ルオーの育った下町の住人であり、何らかの理由でそこに逃れてきたか、または立ち去らざるを得なくなった人びとの姿が重ねられています。ルオーは争いのさなかに生れ、2度の世界大戦を経験しました。彼の作品は、社会の底辺にあえぐ人たちが、戦争や貧困といった人間社会の営みから生み出されるという現実を強く意識させます。

晩年、ルオーの画面は次第に華やかになり、長年にわたって描き続けた道化師やキリストの顔も、苦悩を秘めた表情から穏やかさを増していきます。初期の強い訴えは和らぎ、内面の静けさや喜びを感じさせるようになりました。《マドレーヌ》（挿図2）は、老年期に入ったルオーが好んで描いた女性像のなかの一点で、サーカスの人気道化師がモデルです。豊潤な色使いで、若い女性の生命の輝きが画面いっぱいに表現されています。少年時代のルオーにとって、サーカスの公演は大きな楽しみでした。哀しみを秘めながらも人を楽しませ続ける道化師を描くことで、希望を失わず人生に立ち向かう大切さを伝えようとしたのではないのでしょうか。

本展覧会は、ルオーの初期から晩年までの作品約100点が一堂に会するまたとない機会です。彼の真摯な思いの詰まった名品の数々をぜひご堪能ください。

（学芸員 田中竜也）



2.《マドレーヌ》1956年

●中村正義とルオー

日本画家中村正義の描く女性像や顔のシリーズには、ルオーの画風をほうふつさせる作品があります。ルオーについては次のように語っています。「（ルオー作品の）激しさは、誠実に、厳しく、生きぬいた、人間の努力の、熱烈な、証でもある」（「ルオーのこと」『うえの』78号、1965年）

二川宿本陣まつり 「ひなまつり」

開催中～3月15日(日)

3月3日のひな祭りは、古くは上巳じょうしの節句や桃の節句と呼ばれ、中国より伝わった邪気を祓う行事でした。江戸時代になって、女兒の初節句と成長を祝う日として、雛人形を飾る雛祭りになりました。

豊橋市二川宿本陣資料館では、今年も「二川宿本陣まつり ひなまつり」を開催いたしております。年々雛人形も増え、江戸末期の雛人形や明治・大正の内裏雛、昭和の御殿飾りや段飾り、天神や市松人形などさまざまな雛飾りが、江戸時代の建物である本陣と旅籠屋の中に所狭しと飾られています。また、地元ボランティアのご協力により、華やかなつるし飾りやお雛



御殿飾り 昭和35年(1960)



つるし飾り

様の折り紙作品もたくさんご覧いただけます。企画展示室では、雛祭りをテーマとした浮世絵や雛祭りに飾られた土人形、かわいい大名行列の人形も展示しています。また、今年は新たに男の子に贈られた珍しい雛飾りや、童謡「チューリップ」や「ちょうちょ」などをイメージしたつるし飾りなども飾られています。ご家族やご友人とご覧いただければ幸いです。なお、早春の本陣はととも冷え込みます。温かい服装でご来館ください。
(学芸員 早野祐美子)

平成27年度のおもな展覧会

美術博物館

※太字は有料展

「新」収蔵品展	4 / 7 (火) ~ 5 / 24 (日)
第37回豊橋美術展	4 / 28 (火) ~ 5 / 10 (日)
「軍隊と豊橋」展	5 / 29 (金) ~ 6 / 28 (日)
岡本太郎と中村正義「東京展」	8 / 8 (土) ~ 9 / 27 (日)
生誕120年 武井武雄の世界展	10 / 10 (土) ~ 11 / 23 (祝)
第65回豊橋市民展	11 / 3 (火) ~ 11 / 15 (日)
収蔵品展 [color rooms]	1 / 5 (火) ~ 2 / 21 (日)
模型の魅力展 - タミヤとファインモールド展 -	2 / 20 (土) ~ 3 / 27 (日)
大般若経展	3 / 1 (火) ~ 3 / 27 (日)

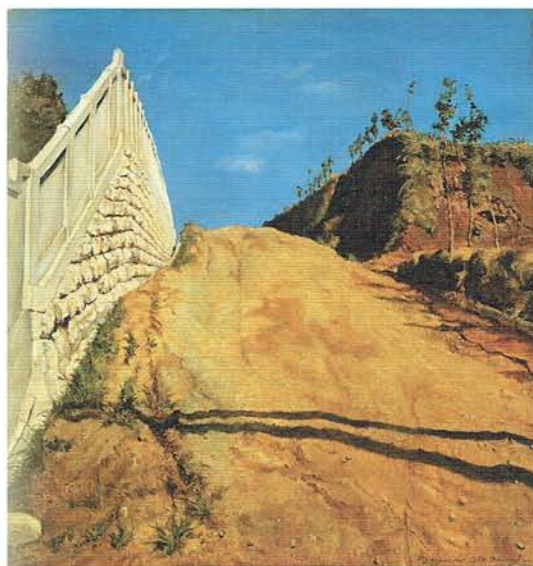
二川宿本陣資料館

東「貝」道五十七次展	7 / 18 (土) ~ 8 / 30 (日)
本陣に泊まった大名たちⅡ	10 / 3 (土) ~ 11 / 15 (日)
忠臣蔵浮世絵展	12 / 5 (土) ~ 1 / 17 (日)

劉生と莊八 — 2人の出会いの不思議

豊橋市美術博物館館長 金原宏行

岸田劉生は、黒田清輝の教えていた白馬会の洋画研究所、葵橋絵画研究所で学んでいた。その帰りに東京日比谷公園で花壇を写生していた18歳の木村莊八と出会う。明治44年12月のことで、偶然であるが、この研究所の先輩が劉生であったので、莊八は劉生グループの仲間の一人になった。翌45年には東京美術学校在学中の萬鉄五郎のアトリエを訪ね、卒業制作の《裸体美人》を見ており、同じ銀座に居住していた劉生と頻繁に会うことになった。莊八の兄莊太が文学青年で、弟の絵画の道に進むのを援助していたからである。



岸田劉生《道路と土手と堀（切通之写生）》
1915年 東京国立近代美術館蔵

1. 画家として

父莊平は、日本橋の牛肉店、「いろは」の創業者で、莊八は第8子であった。大正元年、ヒュウザン会（後のフューザン会）に出品するなど、後期印象派に自分の個性を重ね合わせながら、自己の作品を形成していく。

大正4年10月、劉生の草土社（現代美術社主催第1回美術展覧会）が発足すると、その中心人物劉生が個性を発揮し、《切通之写生》（重文）を発表。やがて、デューラーなどのルネサンス古典絵画に逆行していくと、草土社の連中は皆それに倣っていく。が、この会が2年ほどで解散すると、莊八の後期印象派、キュービズムへの傾倒が始まる。言い換えれば、莊八も途中まではついていくが、息が続かなくなったのである。萬が「木村は草土社にいなかったら、もっと早く木村



岸田劉生《毛糸肩掛せる麗子肖像》1920年
ウッドワン美術館蔵

になれただろう」という。莊八にとって「一つの妙な本当であったか・・・」と回顧している。

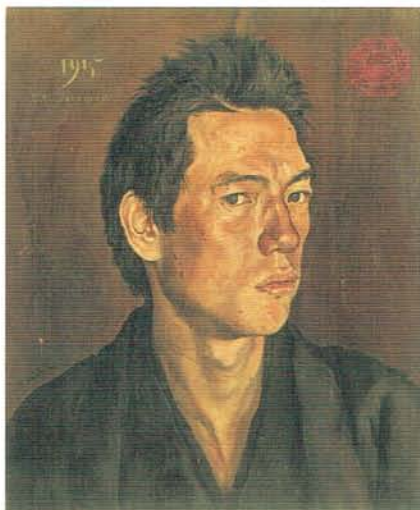
また大正9年、木下杢太郎と朝鮮旅行をし、莊八は、日本の良さを知り、東洋回帰を余儀なくされたのではないかと私は考えている。この年、劉生は、《毛糸肩掛せる麗子肖像》を描き、クラシック様式が最も出ている頃であり、大正11年には春陽会が発足し、莊八は劉生、椿貞雄、中川一政などとともに加わっていくが、劉生の磁場から、いささか離れるようになる。

大正14年4月、劉生が第3回の春陽会名古屋展の最初の日、会場（商品陳列所）で、他の会員と衝突し、劉生が脱会しても、莊八は後を追うことはなかった。しかし、名古屋の画家大沢鉦一郎は、彼の写実に感銘を受け、大正6年に「愛美社」を発足させ、愛知写実派が誕生した。劉生の絵の影響による名古屋の新しい結社の誕生である。

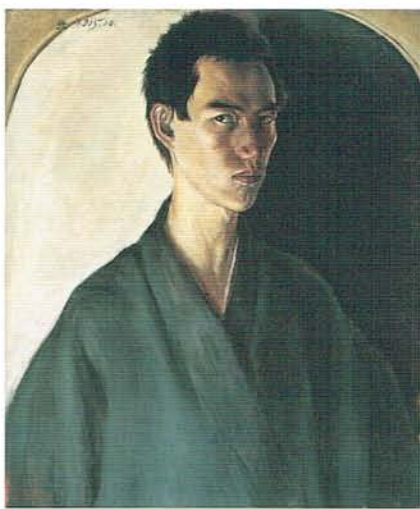
なぜ、莊八が、劉生から距離を置いたかといえば、梅原龍三郎は別として、劉生自らの脱会に他の仲間、友人たちが同調し、ついてくると思っていたようであるが、天才肌でそのデューラー張りの写実は神秘的ですらあり、多くの魅力を発散させる一方で、「われ一人いかん」というエゴが強く、押しの強い性格に対して、人一倍辟易するところがあったからなのではなかろうか。草土社のお山の大将に疎ましさを感じていたのであろう。「和をもって貴し」とする考え方が美術団体の主流でもあったからである。

このため、劉生は孤独の悲哀をなめ、大正12年の震災後、東京から京都に居を移しても、寂しさを紛らすために、茶屋遊びと酒に溺れたといわれている。

画業では、時間をかけずに描ける日本画の濫作に陥り、「海鯛」(=買いたい)先生と呼ばれて、ますます肉筆浮世絵や宋元画に惹かれて収集し、その境地に溺れていく。こうして莊八が劉生の驥尾に付きなかつた



岸田劉生《高須光治君之肖像》1915年
豊橋市美術博物館蔵



高須光治《自画像》1915年
和歌山県立近代美術館蔵

のは、彼の体質に加えて、ヨーロッパでは、すでに立体派や、フォービズムが興っており、それらを知っていた莊八には、劉生の古い時代への遡及主義が反時代的なものと思われたのである。

豊橋の高須光治は、「草土社」に入った頃は、劉生の肖像画(首狩り)全盛の時代で、デューラー張りの構図と色彩の《高須光治君之肖像》は、鬼気迫るものがあった。高須の《自画像》にも同様な傾向が見られる。

2. 戦前・戦後の画業

莊八は、春陽会で発表を続け、指導的な立場になって行く。昭和3年の《パンの会》、同7年の《牛肉店帳場》、同10年《新宿駅》が生まれ、小説の挿絵に抜きんでた個性を発揮した。それにはジャーナリズムが発展し、新聞社内の専属の描き手から、外部の絵描きに発注するようになったことがある。

昭和12年、東京の市井の暮らしぶりの背後に下町の江戸情緒や風情を描いた永井荷風の新聞小説の名作



《永井荷風著「溷東綺譚」挿絵08》1937年
東京国立近代美術館蔵



《『東京繁昌記』より「東西南北」挿絵》1958年
小杉放菴記念日光美術館蔵

『溷東綺譚』に挿絵を担当し、好評のうちに迎えられた。莊八は本領を発揮し、莊八の画壇的な地位も固まった。永井荷風はこの挿絵の評判に対して、機嫌がよくなかったという。春陽会研究所の活動も活発になり、「オノレのウンメイは、これで極まったと思いました」と胸の内を吐露している。

戦後の活動では、江戸東京の歴史・風俗に魅力を再発見した《東京繁昌記》が特筆され、「かつての油絵の具を手に取り、今ある姿を打破して新しい世界を作ろうとした」のである。新聞に連載された絵と文は、変化する東京を画面や文に留めようとするものであった。

私は生前高須光治から「劉生は大変頭が良い人だ」と聞いたことがある。劉生という稀代の巨人とその下から木村莊八や高須光治が輩出し、大正期の個性派の軌跡は、今日でも光芒を放っている。

秋の研修旅行記

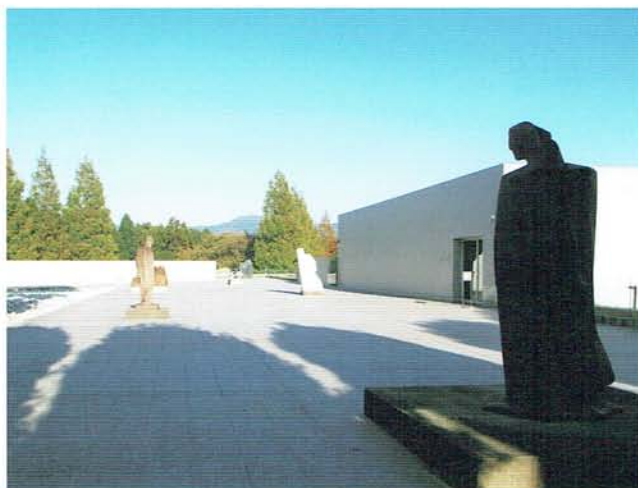
昨年11月15日、秋の研修旅行としてクレマチスの丘（静岡県長泉町）へ日帰りで行ってきました。美術博物館からは金原宏行館長が同行され、会員は36名の参加がありました。参加者の声をお届けします。

クレマチスの丘には、さわやかな風とゆっくりとした時間が流れていました

米光徹志 (917)

豊橋市美術博物館友の会には、3年ほど前から入会しているが、研修旅行には初めて参加させて頂いた。「クレマチスの丘」の二つの美術館、まずはビュフェ美術館を見学。直線を基調とした強烈な輪郭線の中にグレー系、ベージュ系の色彩、第二次世界大戦後の虚無感を描いたとのことだが、現代の殺伐とした都市生活の不安さを表現しているようにも見え、独特の新しさを感じた。30年ぶりの来館だったが、期待したとおり見応えたっぶり。また、同じ作家の同じ絵でも時を経て見ると印象が異なるという発見もあった。

その後、ヴァンジ彫刻庭園美術館とクレマチス・ガーデンを見学。こちらのエリアは初めてだったせいか、今回の見学会では両方のエリアを合わせた「クレマチスの丘」全体が、強く印象に残っている。なだらかな大地にハイセンスな白亜の建物、具象的だが未来



を感じる彫刻群、それと先述のベルナール・ビュフェの作品群、これらが一体となって素晴らしいアート空間を作り出している。両エリアのどの場所も額縁を置けば、そのまま素敵な絵になる風景である。最近の美術館は、周囲の自然と一体化したものが多いが、今回のここは光と風も加わって、「11月15日のクレマチスの丘は、秋の澄みきった青空の下、やさしくてさわやかな風と穏やかでゆっくりとした時間が流れていました」といった具合である。これは晩秋にしては暖かな絶好の晴天に恵まれたことも大きかったと思う。天気的神様と、この日を選んだ幹事さん達の予測力に感謝。そして、この会の必須要件である上質なレストランの食事美味しかったし、第二東名からの富士山の近景も素晴らしかったし、すべてが上出来の一日でした。

◎旅行アンケートから

- ビュフェの絵はあまりに強烈で、胸にトゲが刺さったような感じであった。
- 食事大変おいしく頂きました。サービスをして下さる方々のプロに徹した「おもてなし」に感心しました。
- 思いがけずガーデンに秋バラがあり幸せを感じました。また、何より秋の空がきれいでした。



土曜サロン報告

田島征三さん、中村倫子さんを迎えて (12/13 開催)

絵本作家・田島征三さんと中村正義の長女・中村倫子さんが、当館元学芸員・大野さんの司会で、正義の人柄・画業、从会の活動について語り合った。

まず、田島さんと正義との出会いから。「僕（田島）が無名時代に絵具溶きのアルバイト先として正義宅を訪れた際、自作の写真を見せたとき『君は同志だ！』と。ちょうど日展を脱退し新しいムーブメントを興そうとしていた時期で、斎藤真一、佐熊桂一郎らとともに、毎週のように『ジャンルや上下関係にとらわれない先鋭的集団を！』と語りあっていた。その後、メンバーは増えたが、個性や主張の違いもあり、日本橋三越で第一回从会展を開催するまで十年ほどかかった」。

「（父は）本人なりにビジョンはあったのですが、なにしろ、行動が発作的突発的で」と、倫子さんが笑いながら語り、会場から中村敏子さん（当時、日本橋三越の美術画廊担当）の「正義さんの依頼で、当時の岡田社長との面会を設定したところ、約束の時間をはるかに超える熱弁に困惑しました」など裏話披露の後、正義の絵をスライドで鑑賞。

大野さんの「同じ絵描きとして正義をどう評価する



か」との問いに、田島さんの答えは「正義は伝統や既成概念を壊すため強烈な色を使うなど、逸脱を試みていた。が、いくら崩しても、優れた技量をもっているだけに絵画の要素が成立していた。晩年の墨絵を見ても、本当にうまい」。

倫子さんは正義の「うまい線がひけちゃうんだよ」の言を記憶しているとのこと。

天才ゆえの苦悩と苦闘を改めて感じた対談であった。

（風伯編集部 神野志保子）

会員の継続手続きをお願いいたします

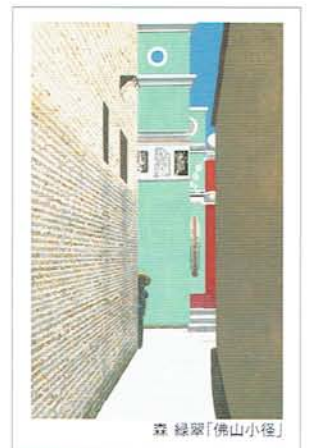
平成27年度も、ミュージアムコンサート、土曜サロン（美術講座）、研修旅行など、皆さんに楽しんでいただける企画を予定しています。

以下①～③いずれかの方法で会費をお支払いください。

- ①美術博物館 …… 窓口にて会費をお支払いください
- ②郵便局 …… 払込票をご利用ください（手数料無料）
- ③銀行 …… 下記口座へお振込みください（手数料有料）

三菱東京UFJ銀行 豊橋支店

口座番号：普通4806768 口座名：豊橋市美術博物館友の会



【平成27年度会員証】

平成27年度総会のおしらせ

◎日時・会場／5月16日（土）13:30～ 美術博物館 講義室

◎記念講演会／宮本昭義さん（NHK文化センター名古屋教室講師）「印象派を超えた画家たち-第1回 ゴッホ」

収蔵品紹介

佛山小徑

森 緑翠 ● MORI Ryokusui

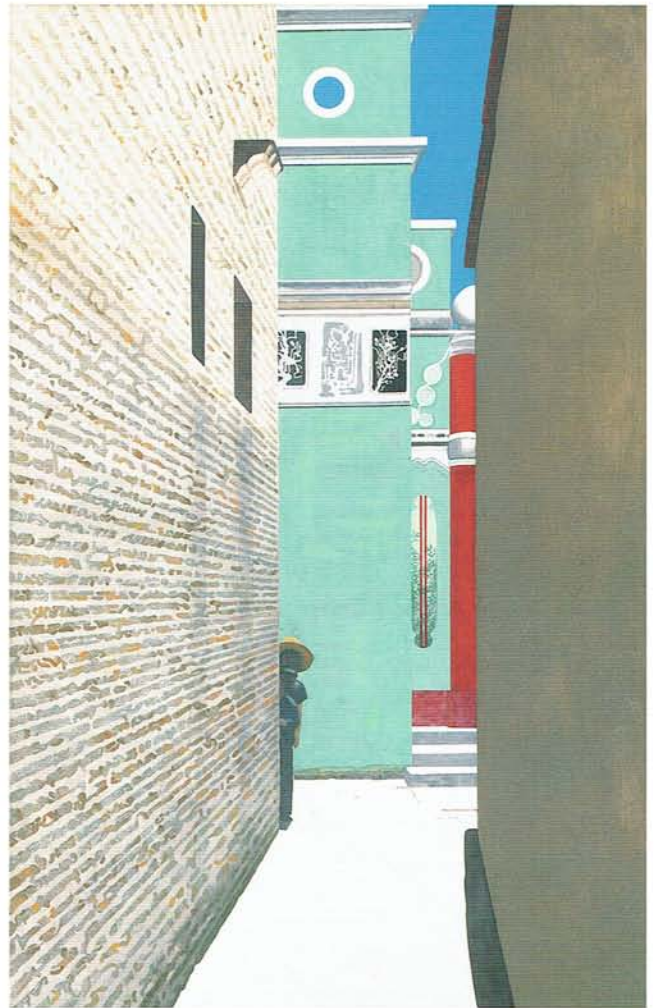
1968年 紙本着彩 111.5×71.5cm 平成26年度購入

東京深川に生まれた森緑翠は、13歳の頃より中村岳陵の蒼野社に入門し、師譲りの清廉な画風で院展や文展において頭角を現しました。戦後は日展や一采社展を拠点としますが、肺結核療養のため当地方を訪れ、豊橋に拠点を定めることになります。昭和36年には師のもとを退き、日展からも離脱。以後、白土会の結成に参画するなど中部地方を中心に活動を展開しました。

昭和41年には白土会主催の中国写生旅行に副団長として参加しますが、そこで目にした異国の光景や風物に新鮮な感興を覚え、新たな境地を拓くことになります。広州、蘇州、太湖、西湖など、中国を主題とする風景画は複数手掛けていますが、なかでもこの《佛山小徑》は代表的な1点といえるでしょう。

佛山とは中国広東省にある窯業で栄えた古い街です。街並や建造物の全容ではなく、街歩きのかなかに迷い込んだ路地、その先に垣間見える建物の鮮やかな色彩とユニークな形象が大胆に切り取られています。路地の奥には建物の陰からこちらをうかがう子供の姿も描き込まれていますが、この作品のスケッチ（当館所蔵）には、こうした人物は見当たりません。他の異国風景を描いた作品にもしばしば子供たちの姿を描いていますが、おそらくは見る者を風景の中へ、画面の奥へといざなう役割を託しているのでしょう。彼らの相貌が定かではないため、建物の不思議な造形と相まって、街の喧騒を離れ、白昼夢をみているような印象を受けます。こうした独特の静かな詩情こそが緑翠絵画の本質といえるでしょう。

本作品は戦後まもない時期から緑翠を支援していたコレクター所蔵の1点で、このたび《無花果》《玉虫》《秋



意》の3点とともに当館の収蔵となりました。4月7日（火）からの新収蔵品展で公開いたしますので、ぜひご覧ください。

（学芸員 丸地加奈子）

編集後記

今年最初の風伯はいかがでしたか。現在開催中のルオー展にちなみ、「飾りの花」を表紙に採用しました。ルオーにしては地味な色彩ですが、宗教的な雰囲気はルオーならではのものと思います。本展を是非ご鑑賞ください。

今号では金原館長にもご寄稿いただきました。館長のお話は、いつも画家の人となりや作品の背景にも触れるので、大変面白いのですが、今回は文豪の微妙な心理を紹介されるなど、興味深い話が満載でした。

この他にも、その場面を想像するとちょっと楽しくなるような記事もあります。探してみてください。

さて、次号からは新年度となり、編集委員も一部交代します。私は今回は最後となりますが、これからも風伯をご愛読ください。（望月志郎）

【表紙作品】ルオー《飾りの花》部分 1947年 パナソニック汐留ミュージアム蔵 「ジョルジュ・ルオー展」にて公開中

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第91号

編集・発行	豊橋市美術博物館友の会
会 長	宮田正人
編 集 長	高須博久（副会長）
編集部長	望月志郎
編集委員	鈴木冷子 神野志保子 河邊満江 藤本逸子 清水貴裕
協 力	豊橋市美術博物館
	〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882
	平成27年2月28日発行